包括的コントロールと部分的コントロールの違い

島　　越　　郎

1. は じ め に

非定形節（non-finite clause）には発音されない主語が存在し，その解釈は非定形節が生起する統語位置により異なることが知られている。生成文法では，このような発音されない主語とその先行詞との関係をコントロールと呼び，コントロール関係を決めるメカニズムを明らかにすることが重要な研究課題の一つになっている。本稿では，包括的コントロール（exhaustive control）と部分的コントロール（partial control）と呼ばれる二つのコントロール関係について考察する。具体的には，非定形節の主語は値が付与されていない変項（variable）であると仮定し，変項への値付与が包括的コントロールと部分的コントロールでは異なることを主張する。

本稿の構成は次である。2 節では，包括的コントロールと部分的コントロールの違いを概観する。3 節では，両者の違いを捉えようとした二つの先行分析を紹介し，それらの問題点を指摘する。4 節では，Chomsky（2000, 2001）で仮定されているフェイズ理論に基づいて新たなコントロールの解釈条件を提案し，包括的コントロールと部分的コントロールの違いを説明する。5 節では，本稿で提案する分析を支持する更なる証拠として，部分的コントロールとは似ているが異なる振る舞いを示す，分離コントロール（split control）と呼ばれるコントロール現象について考察する。6 節は纏めとなる。

2. 包括的コントロールと部分的コントール

非定形節が動詞の目的語として生起する時，非定形節を選択する動詞の項が非定形節の主語として解釈される。

（1） a. John hated to nominate himself.

b.* Mary's colleagues hated to nominate herself.

c.* Mary realized that John hated to nominate herself.

（Landau（2013：29））

文（1a）では，非定形節である不定詞節が動詞 hate の目的語として生起している。この場合，hate の主語である John が不定詞節の主語として解釈される。その結果，John が不定詞節内の目的語の再帰代名詞（reflexive）である himself の先行詞となり，（1a）は許される。他方，（1b）では，女性形の再帰代名詞 herself は不定詞節の主語が女性形の単数名詞であることを要求するが，不定詞節を選択する動詞の主語は Mary's colleagues である。そのため，複数形の colleagues が herself の先行詞になれず，（1b）は非文となる。同様に，（1c）の不定詞節を目的語に取る動詞 hate の主語 John が不定詞節の主語として解釈されるが，John は herself の先行詞になれず，（1c）も非文となる。このように，（1）においては，非定形節を選択する主節動詞の項が非定形節の主語の先行詞として唯一的に解釈される。このようなコントロール関係は包括的コントロールと呼ばれている。

これに対して，非定形節を選択する主節動詞の項が非定形節の主語の先行詞の一部として解釈される場合がある。

（2）　a.　I tried drinking tepid tea.

b.　I regretted killing Sam.　（Wilkinson（1971：575））

（2a）は包括的コントロールの用例で，動名詞節 drinking tepid tea の主語は主節主語の I のみを先行詞とする。一方，（2b）では，主節主語の I は動名詞節 killing Sam の主語の一部に含まれる。この様なコントロール関係は部分的コントロールと呼ばれている。部分的コントロールが可能であることは，次のような用例からも明らかである。

（3）　We thought that ...

a.　the chair preferred［to gather at 6］.

b.　Bill regretted［meeting without a concrete agenda］.

c.　Mary wondered［whether to apply together for the grant］.

d.　it was humiliating to the chair [to disperse so abruptly].

(Landau (2013 : 157))

これらの用例における括弧で示した非定形節の述語は，意味的に複数の主語を要求する述語である。そのため，非定形節の主語は，非定形節を選択する動詞の項以外に主節の主語 we も先行詞としなければならない。例えば，(3a) において，the chair のみを gather at 6 の主語として解釈できない。この場合，gather の主語は the chair を含む主節主語の we として解釈される。従って，(3a) の不定詞節の主語と the chair の間には部分的コントロールの関係が成立している。(3b-d) についても同様である。しかし，この様な部分的コントロールは，全ての動詞が許すわけではない。

(4)　We thought that ...

a.*　John managed [to gather at 6].

b.*　the chair began [meeting without a concrete agenda].

c.*　Mary is able [to apply together for the grant].

d.*　it was rude of the chair [to disperse so abruptly].

(Landau (2013 : 157))

(3) と同様に，これらの用例における括弧で示した非定形節の述語も，意味的に複数の主語を要求する述語である。しかし，(3) とは異なり，これらの文は非文である。この事実は，これらの文では部分的コントロール関係が成立せず，包括的コントロール関係のみが成立することを意味する。例えば，(4a) では，不定詞節を選択する動詞 managed の主語 John が不定詞節の主語として唯一的に解釈されるが，John gathers at 6 は意味的に許されない。

このように，動詞の目的語として生起する非定形節においては，包括的コントロール以外に部分的コントロールが許される場合がある。部分的コントロールは，主語として生起する非定形節でも許されるが，副詞節として生起する非定形節では許されない。

(5)　John said that [meeting/gathering together at 6] would be fine with him.

(Hornstein (2003 : 72, note 76))

（6）　a.* John saw Mary［after/without meeting/gathering at 6］.
　　b.* John saw Mary early［（in order）to meet/gather at Max's at 6］.
（Hornstein（2003：43））

動名詞節が that 節内の主語として生起する（5）では，部分的コントロールが成立し，主節主語である John が動名詞節の主語の一部として解釈される。他方，非定形節が副詞節として生起する（6）では，部分的コントロールが成立せず，主節主語の John が非定形節の主語として唯一的に解釈される。その結果，John が複数主語を要求する述語 meeting や gathering の主語にはなれず，（6）は非文となる。

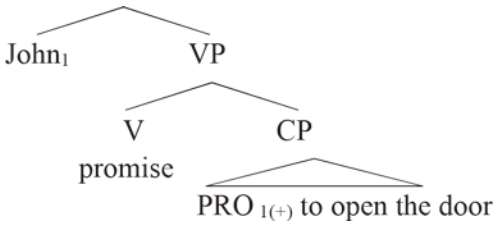
次節では，部分的コントロールと包括的コントロールの違いを説明しようとする二つの先行分析を紹介し，それぞれの分析の問題点を指摘する。

3.　先行分析の問題点

3.1.　再構造化分析：Grano（2015）

Grano（2015）は，部分的コントロールと包括的コントロールの違いを再構造化の有無として説明している。部分的コントロールを許す述語は補部に CP を選択し，従属節を形成する CP 内に含まれる PRO が主節の項とそれ以外の要素を先行詞に取る。

（7）　部分的コントロール述語の構造

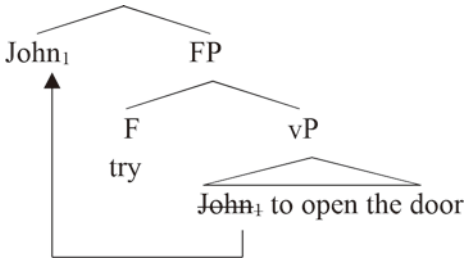


（Grano（2015：17））

この構造では，述語 promise が選択する CP 内に PRO が生起し，promise の動作主である John を含む人が PRO の先行詞となる。（7）では，PRO の先行詞に John が含まれることを下付文字の 1（+）で示している。一方，Grano が仮定する包括的コンロールの

構造は次である。

（8）　包括的コントロール述語の構造



（Grano（2015：17））

この構造では，再構造化（restructuring）の結果，動詞 try が機能範疇 F となり，F の補部に動詞 open を主要部とする動詞句 vP が生起する。（8）は，節を形成する CP が存在しない単一節であり，open の動作主である John は vP 指定部から主語位置である TP 指定部へ移動する。移動操作においては移動の元位置と移動先には同一要素が生起する。そのため，Grano の分析の下では，包括的コントロールの特徴は移動操作の特徴に帰着される。

Grano は，（7）と（8）の構造を仮定する根拠の一つとして，次の対比を挙げている。

（9）　a.　John claimed［that he solved the problem］.
　　b.　John promised［that he would solve the problem］.
　　c.　John wondered［whether he would solve the problem］.
　　d.　John hated［that he solved the problem］.
（10）　a.*　John began［that he solved/would solve the problem］.
　　b.*　John had［that he solved/would solve the problem］.
　　c.*　John managed［that he solved/would solve the problem］.

（Grano（2015：17））

文（9）における主節動詞は全て部分的コントロールを許す動詞であるが，これらの動詞は that 節を目的語として選択できる。他方，（10）における動詞は部分的コントロー

ルを許さない動詞であり，これらの動詞は that 節を目的語とすることはできない。この対比は，（7）と（8）の違いとして説明される。つまり，部分的コントロールを許す動詞はその補部に CP 節を選択できるが，包括的コントロールのみ示す動詞は補部に CP を選択できない。

このように，Grano の分析によると，部分的コントロールを許す不定詞節は PRO を含む CP から構成されているが，包括的コントロールを示す不定詞節は vP と機能範疇から成る単一節である。すなわち，部分的コントロールと包括的コントロールの違いは PRO の有無として説明される。しかしながら，部分的コントロールと包括的コントロールの違いを PRO の有無に帰着させる分析には問題がある。第 1 に，PRO が存在するにもかかわらず，部分的コントロールが許されない事例が指摘されている。ドイツ語における再帰形代名詞 sich を含む次の用例を見てみよう。

（11）weil der Hans$_1$ der Maria$_2$ sich$_{1/*2}$ auf dem Foto zeigte
since the.NOM Hans the.DAT Mary self in the picture showed
‘since Hans showed Mary himself/*herself in the picture’
（Wurmbrand（2001：233））

（12）Es ist dem Hans$_1$ gelungen［sich$_1$ den Fisch mit Streifen vorzustellen］.
it is the.DAT Hans managed self the fish with stripes to.imagine
‘Hans managed to imagine what the fish would look like with stripes’
（Wurmbrand（1998：163））

（13）* weil der Fisch dem Hans［sich mit Streifen vorzustellen］gelungen ist
Since the fish the Hans self with stripes to.imagine managed is
‘since Hans managed to imagine what the fish would look like with stripes’
（Wurmbrand（2001：235））

文（11）では，主格を持つ主語 Hans は sich の先行詞になるが，与格を持つ目的語 Mary は先行詞になれない。このことより，sich の先行詞には制限が課せられ，与格を持つ名詞句は sich の先行詞になれないことが分かる。次に，（12）と（13）の対比を見てみよう。（12）は非人称受動文（impersonal passive）の用例であり，主語位置には虚辞 Es が生起し，意味上の主語である Hans には与格が付与さている。この場合，与格

が付与されているにもかかわらず，Hans が従属節内の sich の先行詞として解釈できる。この事実は，（12）の従属節内には Hans を先行詞とする PRO が生起し，PRO が sich の先行詞となることを意味する。他方，（13）は従属節内の目的語 der Fisch が，その従属節を選択する節の主語位置に移動する長距離受動文（long passive）の用例である。（12）と同様，（13）の従属節内には sich が生起するため，従属節内には sich の先行詞となる PRO が生起しなければならない。しかし，従属節内の目的語が上位節の主語位置に移動する際に，従属節の主語である PRO を飛び越えることになり，この様な長距離受動は許されない。長距離受動が許されるためには，再構造化により従属節が PRO を含まない vP 構造を形成しなければならない。しかし，その場合，sich の先行詞が与格を持つ Hans となってしまう。その結果，（13）の長距離受動文は許されない。以上の点を踏まえて，次の非人称受動文を見てみよう。

（14）* weil es dem Bürgermeister gelang ［sich im Schloß zu versammeln］.
since it the mayor managed self in castle to gather
‘since the mayor managed to gather in the castle’
（Wurmbrand（1998：191））

この文では，（12）と同様，従属節内に sich が生起するため，sich の先行詞として PRO が従属節内に生起すると考えられる。そのため，Grano の分析によると，PRO が上位節の主語 Bürgermeister を含むその他の要素も先行詞に取る部分的コントロールが許されると予測する。しかし，部分的コントロールは許されず，Grano の分析は（14）の非文を説明できない。

部分的コントロールと包括的コントロールの違いを PRO の有無の点から説明する分析の 2 つ目の問題は，イタリア語における以下の用例である。

（15） a. Gianni ha detto a Maria che si preferiva lavare di mattina.
John has told to Mary that self preferred wash in morning
‘John told Mary that he preferred to wash in the morning.’
b. Gianni ha dettoa Maria che preferiva incontrarsi di mattina.
John has told to Mary that preferred meet-self in morning

‘John told Mary that he preferred to meet in the morning.’

c.* Gianni ha dettoa Maria che si preferiva incontrare di mattina.
John has told to Mary that self preferred meet in morning
‘John told Mary that he preferred to meet in the morning.’

（Landau（2000：80））

文（15a）では，接語（clitic）である si が最も深く埋め込まれた節より上位の節の動詞 preferiva の前に接語上昇（clitic climbing）している。このような接語上昇は，動詞 preferiva とその目的語の不定詞節に再構造化が適用されていることを示す。Grano の分析では，接語上昇の有無に関わらず，ある述語が再構造化の適用を許す場合，再構造化は義務的に適用されると仮定されている。そのため，接語が上昇している（15c）だけでなく，接語が上昇していない（15b）においても，動詞 preferiva と目的語の不定詞節には再構造化が適用される。この場合，再構造化が適用した（15c）の不定詞節には PRO が存在しないため，この不定詞節には部分的コントロールが見られない事実は Grano の分析により説明できる。問題は（15b）である。（15c）と同様に，再構造化が適用された（15b）の不定詞節にも PRO が生起しないはずである。しかし，（15c）とは異なり，（15b）の不定詞節は部分的コントロールを許す。そのため，Grano の分析は（15b）の事実を説明できない。[1]

Grano はこの問題に対して，prefer や want 等の願望を意味する動詞の場合，その補部位置に発音されない空の動詞 HAVE が選択される構造を仮定している。この仮定によると，（16a）は（16b）と（16c）の二つの構造を持つことになる。

（16）a. John wants to stay.
b. John wants $[_{VP}$ to stay$]$
c. John wants $[_{VP}$ $Ø_{have}$ $[_{vP}$ PRO to stay$]]$　（Grano（2015：83））

構造（16b, c）では再構造化が適用されており，want は機能範疇である。これらの構造の違いは，John の基底生成される位置にある。（16b）の John は動詞 stay の外項として基底生成されるが，（16c）の John は空の動詞 HAVE の外項として基底生成される。（16c）の HAVE はその補部に動詞句 vP を選択し，vP の指定部には PRO が生起する。Grano は，

このような空の HAVE が接語が上昇していない（15b）の派生にも含まれ，HAVE が導入する PRO によりこの不定詞節に見られる部分的コントロールが説明されると主張している（Grano（2015：85））。しかし，空の HAVE が願望動詞 want の補部にのみ導入され，try や need 等の部分的コントロールを許さない動詞の補部に導入されない理由が不明である。[2]

更に，Grano の分析は，副詞節として生起する非定形節が部分的コントロールを許さないことを示す（17）（=（6））の事実をどのように説明するかが不明である。

（17）　a.* John saw Mary［after/without meeting/gathering at 6］.
　　b.* John saw Mary early［（in order）to meet/gather at Max's at 6］.
（Hornstein（2003：43））

付加詞条件（the adjunct condition）により，副詞節内の主語と主節の主語を移動操作により関連付けることはできない。そのため，Grano の分析によると，（17）の括弧で示した副詞節内には PRO が生起することになり，副詞節として生起する非定形節が部分的コントロールを許すと誤って予測してしまう可能性がある。

3.2.　叙述分析：Landau（2015）

Landau（2015）は，部分的コントロールを許す述語は態度述語（an attitude predicate）であるという一般化を述べている。態度述語の補部節の意味内容は，現実世界の視点からではなく，その述語の主語の認識様態の点から述べられている。主語の認識様態が異なる場合，態度述語の補部節が表す意味も異なる。例えば，Bill と Ralph は古くからの知人ではあるが，Ralph が Bill の新しい上司に任命されたことを Bill はまだ知らない状況を考えてみよう。この場合，以下の言い換えは成立しない。

（18）　Bill imagined Ralph jogging in the park.
　　≠ Bill imagined the new boss jogging in the park.　（Landau（2015：18））

この意味の違いは次のように説明される。（18）における主節動詞 imagine は態度動詞であり，その補部節は主語 Bill の認識様態を通して述べられている。具体的には，古く

からの友人として認識している人物である Ralph が公園でジョギングしていることが述べられている。現実世界では Ralph が Bill の新しい上司だが，Bill 自身はそのことをまだ認識していない。そのため，imagine の補部節内の Ralph を the new boss に置き換えた場合，文全体の意味が異なってしまう。一方，非態度動詞である see の場合は，言い換えが可能である。

（19）　Bill saw Ralph jogging in the park.
　　＝Bill saw the new boss jogging in the park.　　（Landau（2015：18））

このように，態度述語の補部節内においては，同一人物を指す二つの定の記述表現（a definite description）の置き換えはできない。

以上の態度述語と非態度述語の違いを踏まえ, Landa（2015：19）は, 包括的コントロールを示す不定詞節内では同一人物を指す二つの定の記述表現の置き換えが可能だが，部分的コントロールを示す不定詞節内では置き換えが不可能であることを指摘している。

（20）　包括的コントロールを示す補部：非態度文脈（nonattitude contexts）
　　a.　Bill should greet Ralph.
　　＝　Bill should greet the new boss.
　　b.　Bill started to talk to Ralph.
　　＝　Bill started to talk to the new boss.
　　c.　It was rude of Bill to ignore Ralph.
　　＝　It was rude of Bill to ignore the new boss.

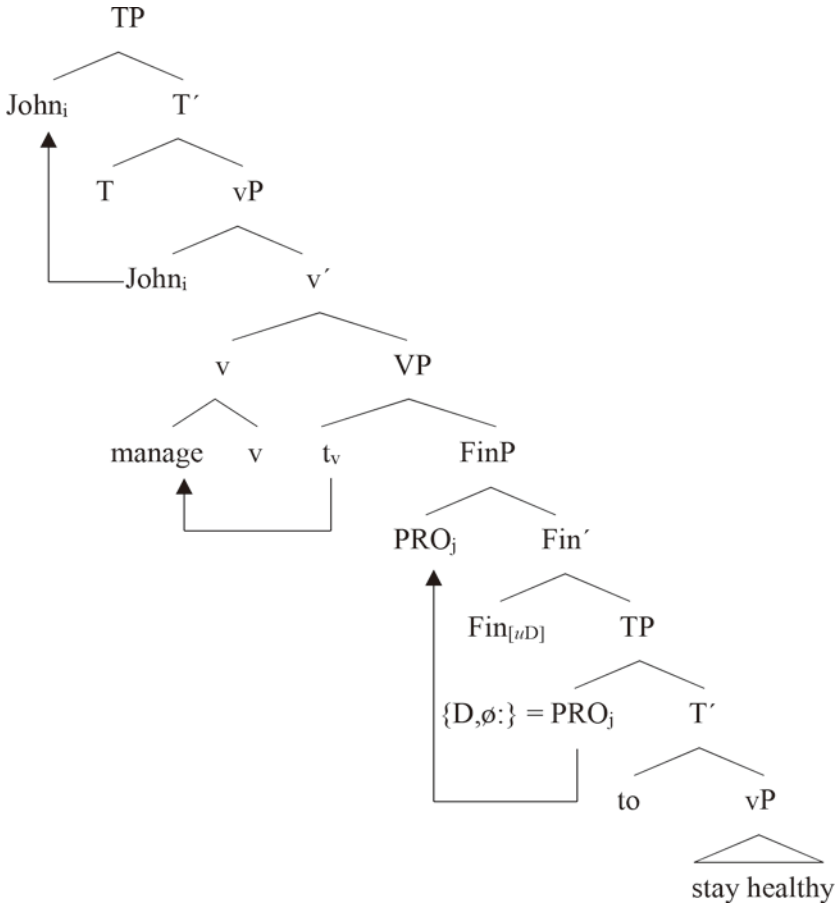
（21）　部分的コントロールを示す補部：態度文脈（attitude contexts）
　　a.　Bill planned to meet Ralph soon.
　　≠　Bill planned to meet the new boss soon.
　　b.　Bill pretended to be Ralph.
　　≠　Bill pretended to be the new boss.
　　c.　Bill asked where to take Ralph for lunch.
　　≠　Bill asked where to take the new boss for lunch.

以上の事実より，Landau（2015：19）は次の記述的一般化を述べている。

（22）　非態度補部（nonattitude complements）は包括的コントロールを強要する。他方，態度補部（attitude complements）は部分的コントロールを許す。

Landau は，（22）の一般化を態度述語と非態度述語の統語構造の違いから説明している。先ず，非態度述語の場合を見てみよう。Landau の分析によると，非態度動詞であり，包括的コントロールのみを許す manage は次の構造を持つ。

（23）

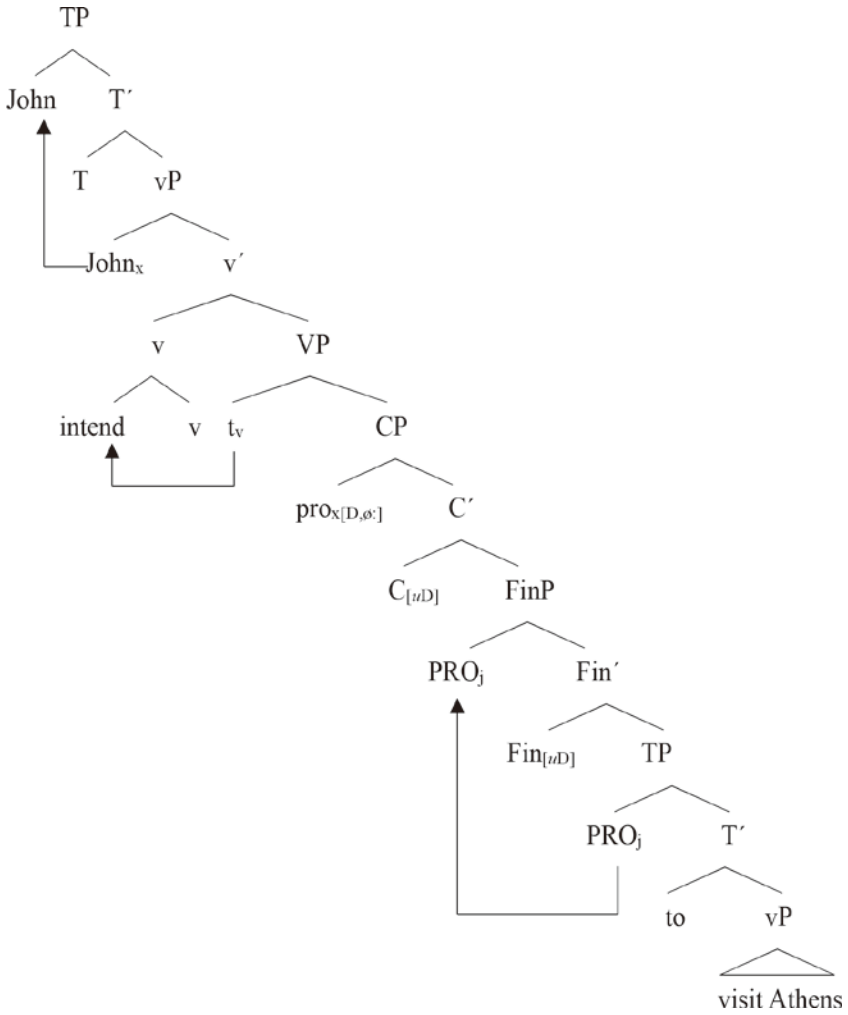


（Landau（2015：26））

この構造において，範疇素性 D と ø 素性を持つ PRO が TP 指定部から FinP 指定部に移動することにより，FinP 全体が一項述語になる。FinP は動詞 manage の補部に生起するが，動詞自体は vP 主要部に移動することにより，一項述語の FinP と vP 指定部に生起する John は叙述（predication）の関係を形成する。その結果，不定詞節内の述語 stay healthy の主語は主節主語 John として解釈される。また，叙述関係により述語の主語になれる要素は一つに限られるため，John 以外の要素が stay healthy の主語として解釈することはできない。

他方，態度動詞であり，部分的コントロールを許す動詞 intend は次の構造を持つ。

（24）



この構造では，（23）と同様，不定詞節は FinP から成り立ち，PRO が TP 指定部から FinP 指定部に移動することにより，FinP 全体が一項述語になる。但し，（23）とは異なり，(24)では主節の態度動詞 intend と不定詞節 FinP の間に CP が介在する。この CP は，態度動詞で表されている出来事がどの様な状況で起きるのかを示す。具体的な状況は態度を保持する者（attitude holder），態度が向けられる対象者（addressee），態度が取られる時間や世界により意味的に規定される。これらの内，動詞 intend の場合は，態度保持者のみが変項 pro として CP 指定部に投射され，主語 John により束縛される。その結果，一項述語である FinP と態度保持者を示す pro が叙述関係を形成し，John が不定詞節内の述語 visit Athens の主語として解釈される。（24）においては，一項述語である Fin は，主節主語の John ではなく，CP 指定部に基底生成された変項 pro と叙述関係を形成する。Landau（2015：78）は，変項 pro が主語 John を含む集合 w を意味する時に部分的コントロールの解釈が許される可能性を示唆している。

このように，Landau の分析によると，包括的コントロールと部分的コントロールの違いは，不定詞節内の FinP が叙述関係を形成する名詞句の違いとして説明される。包括的コントロールのみを示す非態度動詞の FinP は主節主語と直接叙述関係を形成するが，部分的コントロールを許す態度動詞の FinP は，態度動詞の主語により束縛される変項 pro と叙述関係を形成する。この分析の下では，態度動詞の不定詞節において包括的コントロールと部分的コントロールの両方が許される事実は，態度動詞が選択する CP 指定部の変項 pro の値付けの違いに還元される。つまり，pro の値が態度動詞の主語だけから決まる場合は包括的コントロールとなり，態度動詞の主語を含む集団の意味を持つ場合は部分的コントロールとなる。そのため，態度動詞の不定詞節が包括的コントロールと部分的コントロールのいずれを示す場合も，その不定詞節内の FinP は必ず変項 pro と叙述関係を形成し，主節主語とは叙述関係を形成しない。しかし，態度動詞の不定詞節が包括的コントロールを示す場合，不定詞節内の PRO が主節の主語と直接関係を持つと考えられるロシア語の用例が存在する。

（25）a. My　predpočli［PRO　sobrat’sja vse/??vsem　v šest’］.
We.NOM preferred PRO.NOM to.gather all.NOM/??DAT at six
‘We preferred to all gather at six’

b. Predsedatel’ predpočli［PRO　sobrat’sja vsem/*vse　v šest’］.

Chair.NOM　preferred　PRO.DAT　to.gather　all.DAT/*NOM　at six
'The chair preferred to all gather at six'　　（Landau（2008：908））

これらの文における主節動詞は願望動詞であり，態度動詞に分類される。（25a）では主節主語が複数形で包括的コントロールを示すが，（25b）では主節主語が単数形で部分的コントロールを示す。注目すべき点は，不定詞節内に生起する遊離数量詞である。ロシア語の遊離数量詞は，その先行詞の名詞句が持つ格と同じ格を示す。（25b）の部分的コントロールを示す不定詞節内の遊離数量詞は与格を示すが，（25a）の包括的コントロールを示す不定詞節内の遊離数量詞は主格を示す。この事実は，（25b）における PRO は与格を持つのに対し，（25a）の PRO は主格を持つことを表している。（25b）の事実は，不定詞節内の FinP が主節主語とは叙述関係を形成せず，態度動詞が選択する CP の指定部に生起する変項 pro と叙述関係を持つと考えることにより説明できる可能性がある。他方，（25a）の事実が（24）の構造の下でどのように説明されるかが不明である。遊離数量詞の格から推測すると，不定詞節内の FinP は主格を持つ主節主語と叙述関係を形成すると考えられるが，この様な関係は Landau の分析の下では許されない。このように，Landau の分析にとって，（25a,b）の対比をどのように説明するかが問題となる。

また，Landau の分析の下で，主語として生起する非定形節が部分的コントロールを許すことを示す（26）（＝(5)）の事実がどのように説明されるのか不明である。

（26）　John said that［meeting/gathering together at 6］would be fine with him.
（Hornstein（2003：72, note 76））

Landau の分析によると，（26）の主節動詞 said は態度動詞に分類されるが，態度動詞が補部に定形節の that 節を選択する場合，態度を保持する者を示す変項 pro が CP 指定部に基底生成されない。そのため，（26）における非定形節を形成する FinP が叙述関係を形成する変項 pro は存在せず，（26）の非定形節内の述語の主語が主節主語の John を含む複数名詞として解釈される事実がどのように説明されるのかが問題となる。

4.　代案：フェイズに基づくコントロール

本節では，非定形節の主語は値が未指定の変項であり，変項への値の付与の違いにより包括的コントロールと部分的コントロールの違いが生じることを主張する（島(2018)）。具体的には，統語構造はフェイズと呼ばれる CP と vP を単位に構築されると仮定し（Chomsky (2000, 2001)），変項の値付与に課せられる次の条件を提案する。

(27)　変項は，同一フェイズ内に変項を束縛する要素 A が存在する場合，A を先行詞とする。同一の転送領域内に変項を束縛する要素が存在しない場合，その値は未指定となる。

この条件によると, 統語構造が構築される単位であるフェイズ毎に変項の値が決まるが, 値が決まらなくとも派生は破綻しない。派生の途中で値が決まらなかった変項に対しては，派生の最後の段階で値が付与される。また，全ての CP と vP がフェイズを形成するわけではなく，次の CP についてはフェイズを形成しないと仮定する。

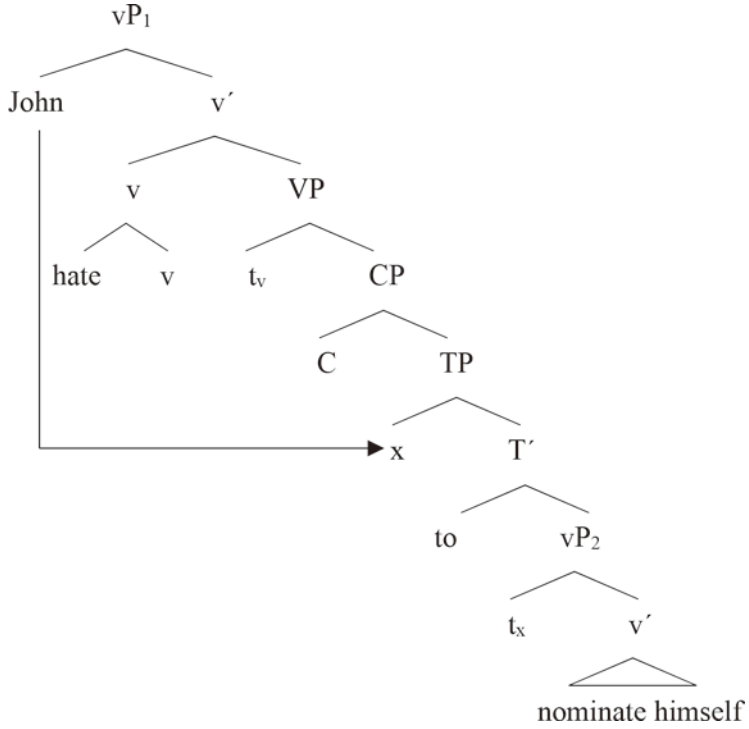
(28)　非定形節を形成する CP はフェイズではない。

この仮定の下では，定形節の CP と vP がフェイズを形成する。

以上の点を踏まえて，非定形節が動詞の目的語として生起する場合の派生を考えてみよう。本稿の分析によると，(29a) は派生の段階で (29b) の構造を持つ。

（29）　a.　John hated to nominate himself.

b.

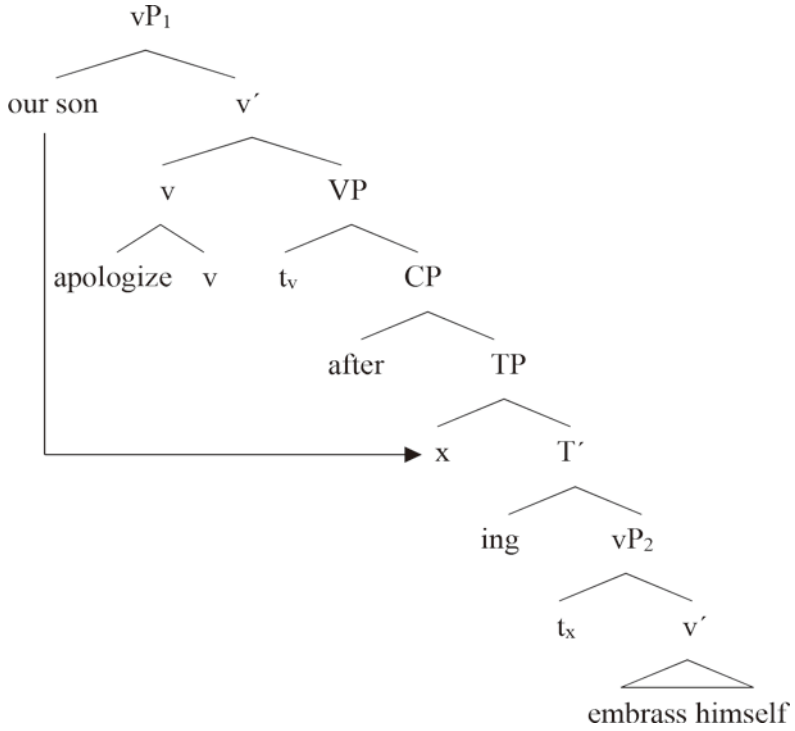


構造（29b）は，主節の動詞句 vP_1 が形成された段階である。埋め込み節を形成する CP は非定形節であるため，（28）によりフェイズを形成しない。フェイズを形成するのは，主節の vP_1 と埋め込み節の vP_2 である。埋め込み節内の vP_2 指定部に基底生成された変項 x は埋め込み節内の TP 指定部に移動する。その結果，変項 x と vP_1 指定部に基底生成された John は同一のフェイズ vP_1 内に生起する。（27）の解釈条件によると，変項 x の先行詞は主節主語 John に決まる。

次に，非定形節が副詞節として生起する場合の派生を考えてみよう。（30a）は，派生の段階で（30b）の構造を持つ。

（30）　a.　Our son should apologize after embarrassing himself.

b.

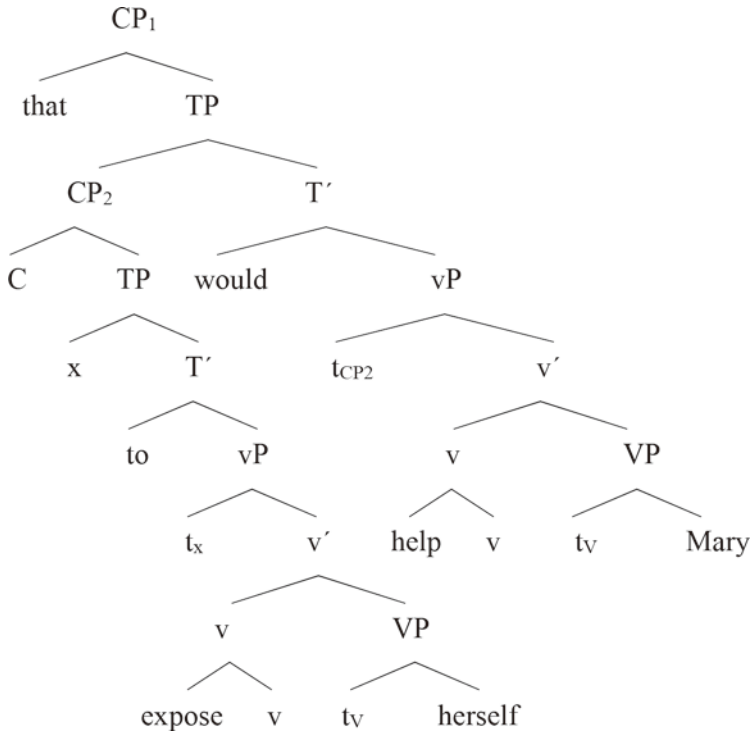


構造（30b）では，副詞節を形成する CP が VP に付加し，主節主語の our son が vP_1 指定部に基底生成されている。また，変項 x は，副詞節内において vP_2 指定部から TP 指定部に移動している。副詞節を形成する CP は非定形節であるため，フェイズを形成しない。その結果，変項 x と主節主語 our son は同一フェイズ vP_1 内に生起し，（27）の解釈条件により，変項 x の先行詞は our son に決まる。

最後に，非定形節が主語として生起する場合の派生を考えてみよう。（31a）は，派生の段階で（31b）の構造を持つ。

（31）　a.　We thought that to expose herself would help Mary.

b.



構造（31b）では，従属節内において，不定詞節を形成する CP_2 が vP 指定部から TP 指定部に移動する。不定詞節内では変項 x が vP 指定部から TP 指定部に移動する。(28) の仮定によると，不定詞節の CP_2 はフェイズを形成しない。この場合，変項 x にとってのフェイズは that を主要部とする定形節の CP_1 である。しかし，この CP_1 においても変項 x を束縛する要素は存在しない。その結果，（27）の解釈条件の下，変項 x の先行詞は（31b）の派生の段階では決まらない。その後，派生が進行し文全体の LF 構造が構築された段階で文脈により変項の値が Mary に決まる。

以上の点を踏まえて，部分的コントロールを示す以下の用例（＝(3)）を考えてみよう。

（32）　We thought that ...

a.　the chair preferred［to gather at 6］.

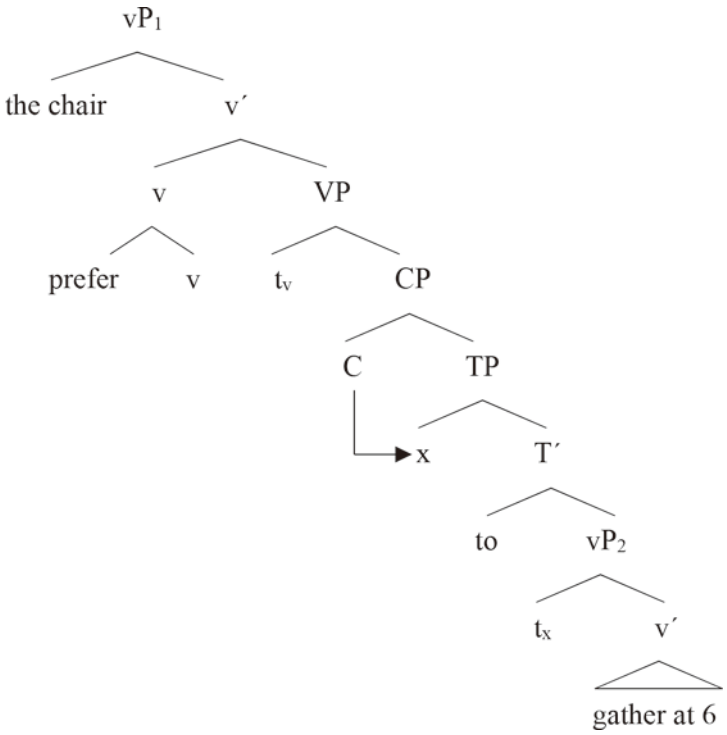
b.　Bill regretted［meeting without a concrete agenda］.

c.　Mary wondered［whether to apply together for the grant］.

d.　it was humiliating to the chair［to disperse so abruptly］.

これらの文においては，(29) と同様，不定詞節の TP 指定部には変項が生起する。但し，(29) とは異なり，これらの変項の先行詞は不定詞節を選択する動詞の主語ではなく，不定詞節を形成する CP 主要部であると仮定する。この仮定によると，(32a) は派生の段階で次の構造を持つ。

(33)



この構造は，主節の動詞句 vP_1 が形成された段階である。この場合，主節動詞 prefer が選択する CP 主要部が変項 x を束縛する（Kratzer (2009)）。その結果，CP 全体が λx.［x gather at 6］という一項述語として解釈される。CP 自体は主節動詞 prefer の補部に生起するため，動詞の語彙特性により，この一項述語の主語は prefer の主語 the chair を含む複数名詞として解釈される。他方，部分的コントロールを許さない（34）（=(4)）の動詞には，不定詞節の主語である変項の解釈を CP を通じて意味的に決定する語彙特性を持たない。

（34）　We thought that ...

a.* John managed［to gather at 6］.

b.* the chair began［meeting without a concrete agenda］.

c.* Mary is able［to apply together for the grant］.

d.* it was rude of the chair［to disperse so abruptly］.

このように，部分的コントロールの可否は，不定詞節を選択する動詞の語彙特性により決まる。[3]

本論の分析の下では，部分的コントロールと包括的コントロールの違いを示すロシア語の以下の用例（(＝(25)）は次のように説明される。

（35）　a.　My　predpočli［PRO　sobrat'sja vse/??vsem　v　šest'］.
We.NOM　preferred　PRO.NOM to.gather　all.NOM/??DAT　at　six
'We preferred to all gather at six'

b.　Predsedatel' predpočli［PRO　sobrat'sja　vsem/*vse　v　šest'］.
Chair.NOM　preferred　PRO.DAT to.gather　all.DAT/*NOM　at　six
'The chair preferred to all gather at six'

包括的コントロールを示す(35a)では不定詞節内の遊離数量詞には主格が付与されるが，部分的コントロールを示す（35b）では不定詞節内の遊離数量詞には与格が付与される。この違いは，不定詞節内の主語である変項への値付けの違いとして説明できる。包括的コントロールを示す（35a）の場合，（29b）と同様に，不定詞節内の主語である変項は同一フェイズ vP 内の主節主語を先行詞とする。そのため，主節主語と同じ主格が変項にも付与され，不定詞節内の遊離数量詞にも主格が付与される。一方，部分的コントロールを示す（35b）の場合，（33）と同様に，不定詞節内の主語である変項の値は CP 主要部を通じて主節動詞により意味的に決まる。その結果，不定詞節内の遊離数量詞には与格が付与される。この様に，ロシア語に見られる（35a, b）の違いは，本論の分析を支持する証拠と考えられる。

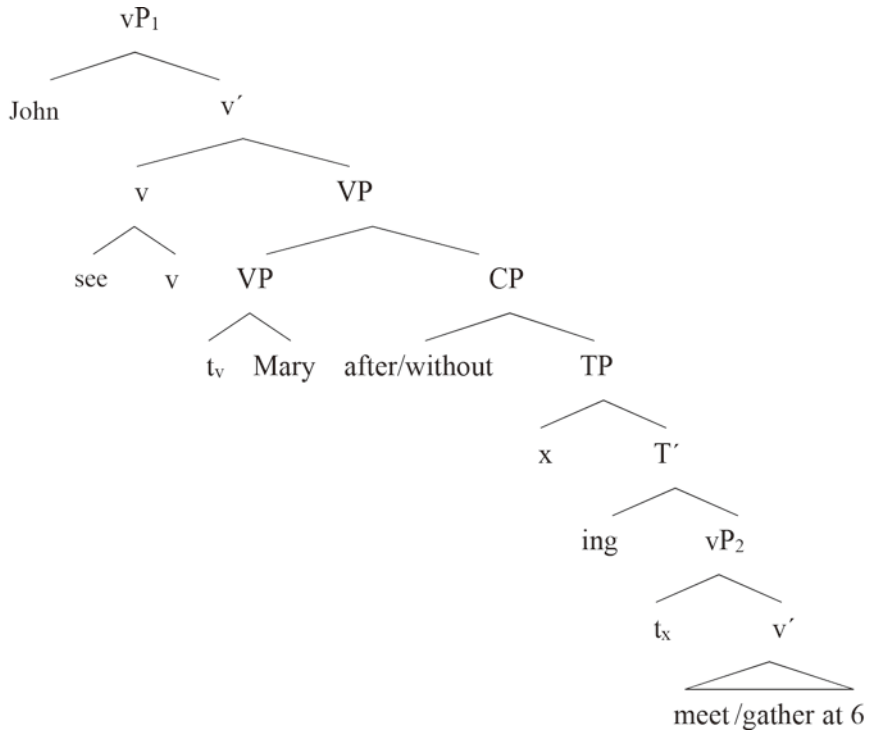
また，本論の分析によると，副詞節として生起する非定形節では部分的コントロールが許されないが，主語として生起する非定形節では許される事実は次のように説明され

る。先ずは，副詞節として生起する非定形節が部分的コントロールを許さないことを示す（36）（=(6)）の事実を見てみよう。

（36）　a.* John saw Mary [after/without meeting/gathering at 6].
　　b.* John saw Mary early [(in order) to meet/gather at Max's at 6].

文（36a）は，派生の段階で（37）の構造を持つ。

（37）



この構造では，副詞節を形成する CP は動詞 see により選択されていない。また，動詞 see 自体も部分的コントロールを許す語彙特性を持たない。その結果，TP 指定部に生起する変項 x が CP 主要部により束縛され，CP が一項述語を形成したとしても，この一項述語の主語を複数名詞句として解釈する動詞が存在しない。この場合，変項に値を与える要素は，同一ファイズ vP_1 内に生起し，変項を束縛する vP_1 指定部の John のみである。そのため，変項は単数名詞として解釈され，述語の意味と齟齬を来す。このよ

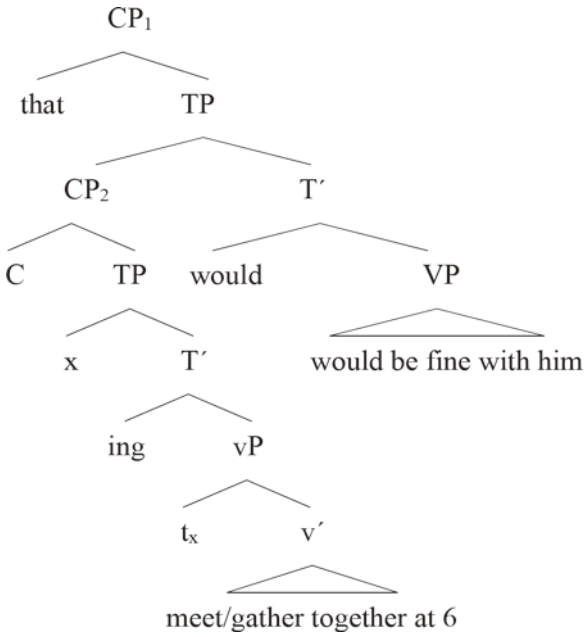
うに，本論の分析は，副詞節として生起する非定形節が部分的コントロールを許さない事実を説明できる。

次に，主語として生起する非定形節では部分的コントロールが許されることを示す（38）（＝(5)）の事実を見てみよう。

（38）　John said that［meeting/gathering together at 6］would be fine with him.

この文は，派生の段階で次の構造を持つ。

（39）



この構造では，非定形節内の変項を CP_2 主要部が束縛した場合，CP 全体が λx.［x meeting/gathering at 6］という一項述語として解釈される。しかし，この述語を選択する動詞が存在しないため，意味的に一項述語の主語を解釈することができない。また，変項を束縛する名詞句も存在しない。その結果，（27）の解釈条件によると，x は自由変項として解釈される。この場合，変項の値は文脈により決まり，主節主語の John を一部に含む複数名詞として解釈される。その結果，（38）は文法的となる。

このように，（27）の解釈条件に基づく本稿の分析によると，包括的コントロールと

部分的コントロールの違いは，変項である不定詞節の主語への値付与の違いとして説明される。包括的コントロールでは変項と同一フェイズ内に生起する名詞句が変項の先行詞になるが，部分的コントロールでは変項と同一フェイズ内にある CP 主要部が変項の先行詞となる。

5.　更なる考察：部分的コントロールと分離コントロールの違い

不定詞節の意味上の主語が，不定詞節を選択する動詞の複数の項に対応するコントロールの形式が指摘されている。

(40)　a.　John$_i$ proposed to Mary$_j$ [PRO$_{i+j}$ to meet each other at 6].
　　b.　John$_i$ asked Mary$_i$ [whether PRO$_{i+j}$ to get themselves at a new car].
　　c.　John$_i$ discussed with Mary$_j$ [which club PRO$_{i+j}$ to become members of].
(Landau (2013 : 172))

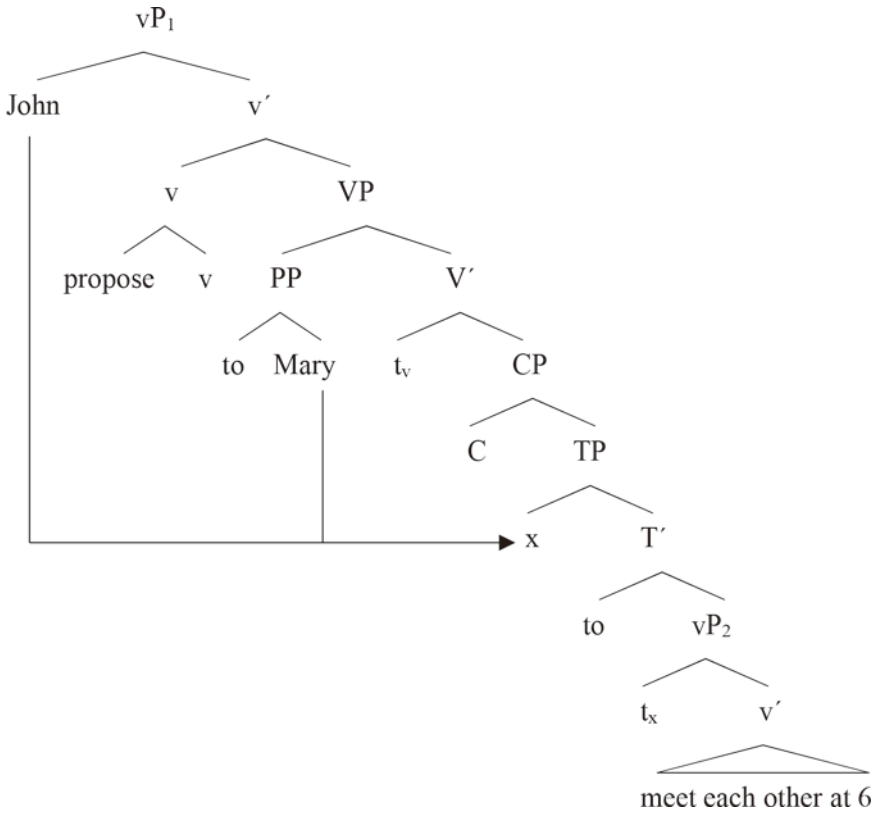
これらの文における不定詞節の主語は PRO で表記されているが，この PRO の先行詞は主節の主語と目的語に対応する。例えば，(40a) では，提案する人である John と提案される人である Mary が PRO の先行詞となる。このことは，不定詞節内の動詞が複数主語を要求する動詞 meet である事からも明らかである。この様なコントロールの形式は分離コントロールと呼ばれている。

分離コントロールは部分的コントロールと異なる振る舞いを示す。(40) が示すように，分離コントロールの不定詞節内では each other や themselves のような複数名詞を先行詞に取る代名詞が生起可能である。また，複数形の名詞句 members も生起できる。一方，部分的コントロールの不定詞節内では，これらの表現が生起できない。

(41)　a.*　John told Mary that he preferred to meet each other at 6.
　　b.*　John told Mary that he regretted having talked about themselves.
　　c.*　John told Mary that he didn't know which club to become members of.
(Landau (2013 : 161))

本論の分析によると, 分離コントロールと部分的コントロールに見られるこの違いは, 不定詞節の主語である変項に対する値付与の違いとして説明できる。先ずは，分離コントロールについて見てみよう。（40a）は，派生の段階で次の構造を持つ。

（42）



この構造は，主節の動詞句 vP_1 が形成された段階である。（28）により，非定形節の CP はフェイズを形成しない。フェイズを形成するのは，主節の vP_1 と埋め込み節の vP_2 である。不定詞節の主語である変項 x は TP 指定部に移動し，vP_1 フェイズ内に生起する。その結果，（27）の解釈条件により，同一フェイズ内に生起する John と Mary が変項 x の先行詞として解釈される。そのため，変項は複数名詞句として解釈され，each other の先行詞として機能する。他方，（41a）における不定詞節の主語である変項は，（33）の構造で示すように, 不定詞節を形成する CP 主要部により束縛される。その結果, (41a) における不定詞節の主語である変項は複数名詞句を直接の先行詞として持たず，each

other の先行詞として機能することができない。（40b,c）と（41b,c）の対比も同様に説明できる。このように，本稿の分析は，部分的コントロールと分離コントロールに見られる違いを捉えることができる。

6. ま　と　め

本稿では，非定形節内の発音されない主語の意味解釈に見られる包括的コントロールと部分的コントロールの違いについて考察した。先ず，包括的コントロールと部分的コントロールの違いを再構造化や叙述関係に基づいて説明しようとする Grano（2015）と Landau（2015）の先行分析の問題点を指摘した。その後，代案として，非定形節内の発音されない主語は変項であると仮定し，変項への値付与が Chomsky（2000, 2001）で仮定されているフェイズ理論に基づいて行われる新たな解釈条件を提案した。本論の分析によると，包括的コントロールにおける変項は不定詞節を選択する動詞の項により束縛されるが，部分的コントロールにおける変項は不定詞節を形成する CP 主要部により束縛される。本論の分析の分析の下では，副詞節として生起する非定形節では部分的コントロールが許されないが，主語として生起する非定形節では部分的的コントロールが許される事実が統一的に説明できる。更に，本論の分析を支持する更なる証拠として，部分的コントロールと分離コントロールの違いが説明できることも論じた。

注

* 本稿の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究（C）課題番号 20K00657）の援助を受けている。

1） Grano（2015：80）は，願望動詞 want には再構造化が適用されるが，prefer や wish の願望動詞には再構造化が適用されないと仮定している。この仮定が正しいとすると，（15b）が部分的コントロールを許さない事実は Grano の分析にとって問題にならないが，接語上昇を示す（15a）が問題となる。

2） Grano（2015：102）は，want が態度述語（attitude predicate）であり，HAVE の導入により態度保持者（attitude holder）の意味が保証される仮定している。この仮定の下では, HAVE が導入されない（16b）の派生においては，態度保持者が存在しないことになり，態度述語の意味がどの様に保証されるのかが不明である。

3） 部分的コントロールの詳細な意味分析については，Pearson（2016）を参照。

参　考　文　献

Chomsky, Noam（2000）“Minimalist Inquiries : The Framework,” *Step by Step : Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik,* ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam（2001）“Derivation by Phase,” *Ken Hale : A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.

Grano, Thomas（2015）*Control and Restructuring*, Oxford University Press, New York.

Hornstein, Norbert（2003）“On Control,” *Minimalist Syntax*, ed. by Randall Hendrick, 6-81, Blackwell Publishing, Oxford.

Kratzer, Angelika（2009）“Making a Pronoun : Fake Indexicals a Windows into the Properties of Pronouns, *Linguistic Inquiry* 40, 187-237.

Landau, Idan（2000）*Elements of Control : Structure and Meaning in Infinitival Constructions*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Landau, Idan（2008）“Two Routes of Control : Evidence from Case Transmission in Russian,” *Natural Language and Linguistic Theory* 26, 877-924.

Landau, Idan（2013）*Control in Generative Grammar*, Cambridge University Press, New York.

Landau, Idan（2015）*A Two-Tiered Theory of Contorol*, MIT Press, Cambridge, MA.

Pearson, Hazel（2016）“The Semantics of Partial Control,” *Natural Language and Linguistic Theory* 34, 691-713.

島　越郎（2018）「コントロールとフェイズ」『東北大学文学研究科研究年報』67 号，1-19, 東北大学大学院文学研究科

Wilkinson, Robert（1971）“Complement Subject Deletion and Subset Relations,” *Linguistic Inquiry* 2, 575-584.

Wurmbrand, Susi（1998）*Infinitives*, Doctoral dissertation, MIT.

Wurmbrand, Susi（2001）*Infinitives : Restructuring and Clause Structure*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Exhaustive and Partial Control

SHIMA Etsuro

Control is a phenomenon whereby the missing subject of nonfinite clauses is understood to refer to some linguistic or contextual referent and has been one of central research topics in linguistic theorizing since the early days of generative grammar. One of research issues in control theory is how to relate the unexpressed subject of a complement clause (the "controlled position") to an argument of the embedding predicate (the "conrroller"). In this connection, Landau (2000) observes that control complements divide into two classes : one class forces strict identity between the controller and the controlled position, labeled "exhaustive control." The other class only requires that the controller be interpreted as a proper superset of the controller, a relation labeled "partial control." As for these two kinds of control relation, Grano (2015) argues that exhaustive control predicates instantiate functional heads in the inflectional layer of the clause and hence give rise to monoclausal raising structures, whereas partial control predicates instantiate lexical heads and hence give rise to biclausal structures containing a silent pronoun PRO. Independently of this analysis, recasting the distinction between exhaustive and partial control in terms of the underlying semantic notion of attitude reports, Landau (2015) claims that partial control is established by logophoric anchoring, while exhaustive control boils down to predication. In contrast to these two previous approaches, I will propose an alternative analysis whereby the controller in exhaustive control is an argument of the embedding predicate, whereas the one in partial control is the complementizer selected by the embedding predicate, under the assumption that the missing subject of nonfinite clauses are variables whose antecedents are determined according to the phase impenetrability condition proposed by Chomsky (2000, 2001).